

# ダイナミックな建築 ~ 敷地： 南九州 宮崎県都城市 ~ **優秀賞**

東京理科大学 理工学部 建築学科



石沢 英之

日本の最南西端に位置する南九州は、阿蘇山、霧島山、桜島、開聞岳などの火山地帯と、シラス台地などの未だに原始の歴史が完結し得ない特異な地形、時空間が存在する。敷地設定した南九州、宮崎県都城市は盆地の北西に、天孫降臨（日本発祥）の神話で知られる霧島山が圧倒的なスケールで聳え立ち、この地のダイナミズムを象徴している。そこで、市街地を挟んで霧島山と南東に約30km先で対峙する山の北西向きの斜面に「ダイナミック」ということを手掛かりにホテルを計画。この場所が鮮烈に放つ固有のダイナミズムを、建築を通して具現化したいと思う。今まで人々が微妙にしか関わってこなかったこの場所に、自然をダイナミックに具現化した建築という枠を越えた自然の彫刻群をつくる。



## 講 評

この作品は霧島さまの脈々と息づいた歴史を背景に、その神秘的な風土性を加味し、それをダイナミックなものとして捉え建築的に表現したものである。霧島さまを見通せるこの地にそのエネルギーを浴びるが如く、この建築は大地を最小限に開発し、へばりつくような大胆さを示している。まるで、大地に畏怖し、接吻し、大地への敬意がそこにある。地元産の間伐材の杉集成材、シラスの内壁、火山灰のトップライトなどの表面はそれらを暗示する。地面の空間は必要以上に地面が強調され、上昇気流の間では上部空間にこれも大胆なまでにその空間は上昇されている。全てが大胆である。折れるものはより折れる。曲がるものはより曲がる。上昇するものはより上昇するそんな空間がそこにある。そこに妥協はない。あるものは神聖な場としての畏敬の念である。それが面白い。提案はホテルであるが、年寄りには泊まれないであろうプランはホテルとしての提案の無理がある。しかし、それはたいした問題ではない。ここまでダイナミックにすることに潔さと情熱を感じた。この場を愛するからこそ成しえる空間は霧島さまに何かを伝えるだろう。

[ 審査員 荻原 幸雄 ]